

(要約版)

酒とタバコからみた蝦夷地の内国化に関する研究

助成研究者 関根達人(弘前大学人文社会科学部・日本考古学)

1. 研究目的

酒とタバコは、米や木綿などの衣類とともに主要な蝦夷地交易品であり、同時にウイマムと呼ばれる朝貢やオムシャ（アイヌに対する慰労行事）の際の下賜物にもなっており、近世和人社とアイヌとの関係性を考える上で非常に重要である。和人は酒とタバコをアイヌ支配の道具として巧みに利用し、アイヌはそれらを自らの儀礼の中に組み込んでいた。また、18世紀以降本格化する和人の漁場進出に関連して内地から多量の酒が蝦夷地に運ばれた。本研究は、北海道内から出土する陶磁器製の酒瓶やキセルなどの考古遺物を通して、和人がいついかなる形で蝦夷地へ進出したか、和人から入手した酒とタバコがアイヌの社会と文化にいかなる影響を与えたか、蝦夷地内国化の過程を探る。

2. 研究方法

本研究は、北海道ならびにサハリン出土の陶磁器データベースやアイヌ墓の副葬品に関するデータベースから酒瓶やキセルを抽出し、それらの時間的・空間的分布状況から、アイヌや北海道に渡った和人の酒やタバコの消費状況を把握することを第1段階とする。第2段階としては、北海道やサハリン各地から数多く出土している越後産の焼酎徳利（松前徳利）について、生産地である新潟市西蒲区松郷屋と阿賀野市笹岡・村岡・山崎地区で窯跡の踏査を行い、窯跡採集資料に基づき型式変遷と窯ごとの製品の特徴を把握したうえで、第1段階の研究で得られた消費地での焼酎徳利の出土状況と照合し、越後産焼酎の生産と流通の実態を解明する。第3段階として、アイヌ絵などの絵画資料や古写真に登場する酒瓶やキセルの検討を行い、第1・2段階で得られた考古学的知見との照合を通して、アイヌ社会における酒とタバコの歴史的意義を考察する。

3. 研究成果

近世初期に日本を訪れたヨーロッパ人の記録や出土資料から、アイヌに喫煙の風習が伝わったのは、本州に近い道南の渡島半島周辺では1630年代以前であり、道央の噴火湾周辺より東や北の地域ではそれよりやや遅れて1640～50年代に伝わり急速に広がったことが判明した。アイヌに伝世した喫煙具や出土資料からは、本州に近い道南や道央では18世紀には日本産の金属製キセルがかなり普及していたが、金属製のキセルが手に入らない場合、

北海道アイヌの人々はノリウツギを素材としてニキセリと呼ばれる木製のパイプを製作しており、さらにノリウツギが自生しない道北やサハリン（樺太）、クリル（千島）のアイヌはスマキセリと呼ばれる石製のキセルを製作し、金属製キセルの代用としたことが判明した。サハリン島では樺太アイヌが住む南部の遺跡のみならず、ニブフやウイルタの居住地である中部以北からも日本製のキセルが出土しており、彼らは樺太アイヌを介して、それらを手に入っていたと考えられる。

煙草や金属製キセルは米・糶・酒とともに、蝦夷地産品の交換比率を示す際の基準品目でもあった。北海道アイヌは17世紀前半から交易やウイマムやオムシャを通して和人から金属製のキセルを手に入っていた。アイヌには広くキセル受取り渡しの儀礼がみられるように、彼らにとって喫煙は、本来極めて儀礼的な習俗であった。しかし、和人によりタバコやキセルが大量に入手しうる環境が整えられたことから、喫煙は飲酒以上に早くから儀礼的意味合いが薄れ、日常生活習慣へと変容したとみられる。日本産の金属製キセルでタバコを吸う姿は、ごく当たり前のものとしてアイヌの人々の日常生活の中に見られたのである。

アイヌ社会では儀礼用に主に稗を原料とするトノトと呼ばれる濁り酒が造られていた。対アイヌ交易品のトップは米だが、米は糶とセットで記載されていることが多いことから、和人から入手した米の多くはアイヌの人々により酒米として利用されたと考えられる。また、ウイマムやオムシャの際にアイヌへ下賜された物品や蝦夷地場所での対アイヌ交易品の古記録では、米や木綿などの衣類とならんで酒やタバコが非常に目立つ。オムシャの際にアイヌに配給される酒は、役職や年齢、功績に応じて種類や分量が細かく決められており、和人が酒をアイヌ支配の道具として巧みに利用していたと考えられる。自ら酒を醸さずとも和人から大量の酒を手しうる環境が整うにつれ、アイヌにとって酒は宗教儀礼に係る本来的な意味合いが薄れ、嗜好品へと変質したと推察される。

アイヌの人々が好み宝物視した日本製漆器は基本的に酒儀礼の道具に使われた。また彼らは伝統的に食器には陶磁器を使わなかったが、18世紀末以降、蝦夷地に渡った和人が各所に開いた漁場で働かされることにより、筆者が「幕末蝦夷地3点セット」と命名した日本産の陶磁器を使うようになった。幕末蝦夷地3点セットのうち北前船によって味噌や塩、あるいは酒や醤油を運ぶための容器として使われた上野・高取系の中甕と越後産の焼酎徳利・コンプラ瓶はいずれも基本的には、蝦夷地の経済的・政治的内国化が進んだ19世紀中葉、本州から北海道島に渡った和人の需要を満たすためのものであったが、同時に漁場で和人に交じって働くアイヌや安政の開港によって箱館に寄港・滞在する外国人にも受容される場所となった。安政の開国により新潟と箱館の結びつきはさらに強まり、越後酒の酒粕を原料として信濃川河口の沼垂周辺で生産された焼酎が、新潟県内で焼かれた徳利に詰められ、新潟港から蝦夷地・北海道に向け大量に移出された。日本酒に比べ安価で度数の高い新潟産の焼酎は、煙草とともに寒さの厳しい北の漁場で働く労働者やアイヌの生活

に欠かせない嗜好品となった。

以上、本来アイヌの人々にとって酒もタバコも元々は宗教儀礼との結びつきが強く日常的に摂取されるものではなかったが、和人を通して大量の酒やタバコ・キセルが入手されるようになるにつれ、非日常的な儀礼上のアイテムから日常の嗜好品へと変化した。新潟・箱館の開港により蝦夷地・北海道に運ばれるようになった大量の新潟産焼酎は、同じ漁場での共同生活を通して、アイヌの人々が伝統的な生活を捨て、和人への同化を加速する役割の一端を担ったと考えられよう。